

SATO YAMA UMI プロジェクト

2019 年度ユースインターンシッププログラム活動報告書

中村 優花

I. インターン概要

派遣国：ニューカレドニア ヌメア

受け入れ先団体：Conservation International NC

活動期間：2020 年 1 月 13 日～2020 年 2 月 20 日

II. 活動内容

1. マングローブの保全・回復活動（SOS Mangroves）
2. カナール島の保全活動（CIE）
3. 翻訳活動
4. マンタのタグging

1. SOS Mangroves とのマングローブの保全・回復活動



[SOS Mangroves](#) はヌメアを中心にマングローブの保全・回復活動を行っている団体である。（左の図は当団体のロゴ）

この団体の代表である Monik LORFANFANT をはじめ、彼女とともに活動を行うカナックの青年たちにお世話になり、ニューカレドニアのマングローブについて学び、活動に参加した。ヌメアにも多くマングローブが存在し、そのうちリビエール・サレ、チナ

そしてウエモなどの地域で活動を行った。マングローブは海岸沿いに位置するため、潮の満ち引きに合わせて行う必要があり、活動は主に干潮のときのみ行われた。

活動内容は、主に以下のものである。

- A) マングローブの種子の採取
- B) 採取した胎生種子を植える
- C) 種子を育てる（1~2年かかる）
- D) 種子・苗を植える（植林）
- E) 植えた苗の管理
- F) 清掃・見回りなどの業務



A) 集めたマングローブの種子



C) 容器に種子を植える



D) 等間隔に植えられた苗



F) マングローブのゴミの収集

実際に活動をすると、植林作業のみでなく、ゴミ拾いや水路の管理（海から海水が流入してくるように通り道を確認する必要がある）、苗が流されていないかの確認作業などが非常に重要かつ時間のかかる仕事だということがわかった。また、過剰な太陽光や水不足などはマングローブの苗をだめにするが、原因がわかるものばかりでもなく、再生活動の難しさを垣間見た。

ニューカレドニアのマングローブは、道路や空港などの建設や鉱山活動などにより減少してきた。しかしながら、カナックなどのポリネシアの民族の

人々にとって、マングローブは生活の場であると同時に、魚を捕って生計をなす必要不可欠な場であるため、彼らを中心にマングローブを保全する活動が行われ始めたようである。今もなお、都市化に伴い、マングローブへの悪影響は続いているが、SOS Mangroves などをはじめとする活動により以前より状況は良くなっているとのことだった。

2. CIE とのカナール島の保全活動

[CIE \(Centre d'Initiative a l'Environnement\)](#) は、ニューカレドニアにおいて環境教育を中心に活動している団体である。CIE は、アンスバタのビーチからボートで約5分のところに位置するカナール島 (ilot Canard) の環境保全に取り組んでおり、その活動に参加させてもらった。



ボランティアの様子

CIE とボランティアの方々が行っている活動は、大きく分けるとサンゴの保全活動と海鳥の保護である。具体的には、生分解性の日焼け止めの使用やサンゴを傷つけないように監視・声かけなど多岐にわたる。

このような活動の背景には、カナール島の生物多様性が関係している。カナール島の周辺の海域は保護水域内にあるため、サンゴや魚、ウミガメなどを非常に多くの生き物が生息しているのである。また、サンゴは浅瀬から広がるため、注意を払わなければ容易にサンゴを傷つけてしまう。また、島には多くの海鳥が産卵しにやってくるが、人が巣に近づくすぎると、親鳥が警戒し、卵や雛を放置して去ってしまう。このようなことを防ぐため、立ち入り禁止区域を設け、見回りを行っているとのことだった。

3. 翻訳活動

プログラム期間中、CIE が主体となって作成されたサンゴ礁やマングローブなどについてのリーフレットをフランス語から日本語に翻訳する活動を行った。また、カナール島の掲示物も日本語に翻訳することで、日本からの観光客の人々にも、島の保全活動や注意事項を知ってもらえるようにした。



左：カナール島の掲示物の1つ。カナール島の概要と保護地域について書かれている。
真ん中：サンゴ礁についてのリーフレット。子供向けのもので、書き込ながらサンゴの生態や役割について知ることができる。
右：マングローブについてのリーフレット。ニューカレドニアのマングローブの植生や生息する生き物についてなど、一通り学ぶことができる。

翻訳をすることで、マングローブやサンゴ礁の概要を知ったり、フィールドワークで学んだことの確認を行ったりすることができ、自身にとっても非常に有益なものとなった。

翻訳物が、より多くの日本人にとってサンゴ礁やマングローブについて知る手助けとなり、さらには、ニューカレドニアの特異な自然環境や生物、そしてその脆弱さおよび現状を知るきっかけとなることを願う。

4. マンタのタギング



マンタに GPS 付きのタグをつけるというミッションに1週間同行させてもらった。このミッションの目的は、GPSにより一定期間マンタの動向を知ることである。マンタは、ポリネシア地域で象徴的な生き物とされるなど、昔から関わりが深いものの、生物学的には解明されていないことが多い

のである。週の前半は、本島北東に位置するトゥオ（Touho）で行い、後半はウベア島で行った。サイクロンが通過した影響もあり、海の状態やマンタの有無など遭遇が懸念されたが、トゥオとウベアでそれぞれ目標であった4匹の個体にタグをつけることができた。（写真は左から Thomas と Mark）

私自身は、トゥオでは海の状態が良くなかったこともあり、ポートの上から、メンバーの活動の様子を写真に収めるのが主な役割であったが、ウベアでは実際に海に入り、タグ付けの様子を観察することができた。マンタを見つければ ID の確認やタグ付けができるものだと思っていた



が、マンタを見つけても、留まることなく通りすぎてしまうとタグ付けが難しいことや、海底近くにいることでお腹の写真を撮れず識別のための ID を取れないこと、タグをつけること自体難易度が高いなど、様々な難しさがあることを実際に参加し初めて知った。大変手間のかかる作業であるが、このようにタグ付けを行うことで、その生物の生態を知り、保全への効果的な方法を探れること、また、遺伝子などの情報は強いては人間を含む多くの生物にとって有益なものをもたらすかもしれない点において重要であるということが学べた。

Ⅲ. プログラムを終えて

プログラムを通じ、CINICをはじめ、お世話になった他の団体の活動内容や様子を知ることができたのはもちろん、マングローブやサンゴについての貴重な知識を得ることができ、非常に有益なものとなった。ニューカレドニアがメラネシア系の先住民族であるカナックやフランス出身者など、様々なルーツの人々が共存するユニークな国であったおかげで、現地での日々を通じ、各々の文化や暮らしについても知ることができたのは大きな収穫である。



カナックの伝統的家屋であるカー

インターンを通して様々な気づきを得たが、そのひとつは「つながりを感じる大切さ」である。自然と人間の生活のつながりを肌で感じるのが、行動につながることを学んだのである。この気づきを得たきっかけは、マングローブでの活動の際の「カナックの人々はマングローブの重要性をよく理解しているが、西洋の人はしていない」という言葉である。実際、都市開発の際にこの認識の差が露呈し問題になるようだ。

では、なぜカナックの人々はよく理解しているのだろうか。話を伺ったところ、「カナックは、今でもマングローブを生活の場とし、海や川で採れる魚や果物を主食としている人が多いからではないか」ということだった。つまり、マングローブは彼らの生活に結びついており、その中でマングローブの仕組みや大切さを理解しているということではないかということだ。

私たちも、彼らと同じように海から魚を得て食べているが、自分の手に至るまでの間に数多くの人を介在するため、そのつながりに気づきにくい。日本の人々がマングローブで生活するのは難しいかもしれないが、つながりを感じることができれば、彼らのように自然の仕組みを認識し、行動を起こすことができるかもしれない。どうすれば都会に住む人々がこの感覚を得ることができるか、その方法は今後のひとつの課題とするとしたい。

そして、今回のインターシップで得た多くの経験と学びを社会に還元できるよう努力していければと思う。